博士学位論文審査要旨

２０１８年1月１６日

論 文 題 目： ヒップホップの宗教的機能
—アフリカ系アメリカ人ヒップホップ世代の救済観
学位申請者： 山下 壮起
審 査 委 員：
主 査： 神学研究科 教授 小原 克博
副 査： 神学研究科 教授 水谷 誠
副 査： 同志社大学 名誉教授 森 孝一

要 旨：

1970 年代、荒廃したニューヨーク市のブロンクス区に住むアフリカ系アメリカ人の若者たちの間に誕生したヒップホップは、ポスト公民権運動時代のアフリカ系アメリカ人世代の声となっていった。1980 年代の後半から反社会的な事柄を歌うギャングスタ・ラップが台頭したが、その内容には神や天国、ひいてはイエス・キリストについて言及する歌詞が少なくない。本論文の目的はこの現象について考察し、ヒップホップをアフリカ系アメリカ人の宗教的伝統に位置づけることを通して、その救済的機能を明らかにすることである。

第一章では、ヒップホップにおいて宗教的表現が見られるようになった要因を公民権運動以降の社会的背景と黒人教会の関係から考察している。

第二章では、ヒップホップをアフリカ系アメリカ人の宗教史に位置付けるために、その歴史を奴隷制時代の南北の地域差に着目し概観している。また、ネイション・オブ・イスラームのような宗教組織が、黒人教会の限界に対して果たしてきたオルタナティブとしての機能を検討している。

第三章では、黒人霊歌とブルース、ゴスペル・ラップとの比較を通して、ヒップホップにおける聖俗の混在が、聖俗二元論の二項対立的な図式による救いの限界を超えるものとなり得るかを考察している。

第四章では、聖俗の境界線と「黒人かアメリカ人か」という境界線の狭間で、アフリカ系アメリカ人の音楽が揺れ動いてきたことを取り上げている。その中で、ヒップホップが聖俗の境界線を超克し、聖と俗をつなぎあわせてきた過程を、アフリカの宗教におけるトリックスターなどを手がかりとして考察している。

結論として、ヒップホップにおける救済の諸相は、アフリカ系アメリカ人の宗教史における対立や分断に対する積極的な応答であると考えられる。ヒップホップは「徹底した正直（radical honesty)」において語られる「個」の経験を共有する対話の空間として、多様な現実を反映してきた。そして、「徹底した正直」による対話こそが、多様化した現実のなかで誰をも排除することのない救済の形の探求を可能としてきたのである。ヒップホップはその探求を通して、社会階層の二極化や信仰の私事化、世代間の価値観の違いといった断絶の時代のなかで、アフリカ系アメリカ人のヒップホップ世代を一つの共同体として繋ぎ止めていることを、本論文は明らかにしている。

我が国におけるアフリカ系アメリカ人の研究、とりわけ宗教分野における研究は公民権運動の時代に大きな関心を向けてきたが、それ以降の歴史的変遷については十分な研究がなされてきた

とは言い難い。そのような状況の中で、本論文は、公民権運動以降の新しい世代に着目し、その中に見られる変化や多様性を、ヒップホップを手がかりに的確に整理し、分析している点で、類例のないものである。よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１８年1月１６日

論 文 題 目：　ヒップホップの宗教的機能
　　―アフリカ系アメリカ人ヒップホップ世代の救済観
学位申請者：　山下　壮起
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　小原　克博
　副　査：　神学研究科　教授　水谷　誠
　副　査：　同志社大学　名誉教授　森　孝一

要　　旨：

山下壮起氏は、2009 年 3 月に同志社大学大学院神学研究科博士前期課程を修了し、同年 4 月に後期課程に入学した。山下氏に対し、2018 年 1 月 10 日午前 10 時より神学館会議室において、審査委員による総合試験を実施し、約 2 時間にわたって同氏から十分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について深い認識を有することを確認した。研究に必要な語学力は、博士論文執筆のための英語の文献を正確に読みこなせていることにより十分なものと認められる。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： ヒップホップの宗教的機能－アフリカ系アメリカ人ヒップホップ世代の救済観

氏　　名： 山下　壮起

要　　旨：

1970 年代、ニューヨーク市のブロンクス区に住むアフリカ系アメリカ人の若者たちの間からヒップホップが誕生した。ヒップホップは、アメリカの若者文化に大きな影響力を持つようになり、次第にアフリカ系アメリカ人の若者の声となっていった。ヒップホップにおいてはアフリカ系アメリカ人の若者を取り巻く様々な事柄が取り扱われるが、1980 年代の終わりごろから反社会的なギャングスタ・ラップと呼ばれるラップが台頭し、その反社会的な内容について政治、教育、宗教など各方面から厳しい批判が起こった。しかし、ギャングスタ・ラップに分類されるアーティストのなかには、神や天国、ひいてはイエス・キリストについて言及する者が少なくない。本論文の目的はこの現象について考察し、ヒップホップをアフリカ系アメリカ人の宗教的伝統に位置づけることを通して、その救済的機能を明らかにすることである。

第一章では、ヒップホップにおいて宗教的表現が見られるようになった要因を公民権運動以降の社会的背景と黒人教会の関係から考察した。

第二章では、ヒップホップをアフリカ系アメリカ人の宗教史に位置付けるために、その歴史的展開を奴隷制時代の南北の地域差に着目して概観した。そして、黒人教会の多様性のなかで、ネイション・オブ・イスラームのようなブラック・ナショナリズムを基盤とする宗教団体が、黒人教会のオルタナティブとしての機能を果たしてきたことを明らかにした。

第三章では、黒人霊歌やブルース、またゴスペル・ラップとの比較を通して、ヒップホップの宗教的機能について検証した。ヒップホップは、世俗的霊歌としてのブルースのように、生への徹底した正直によって現実を描き出しながら、神との対話をしている点において霊歌としての機能を果たしている。ヒップホップにおける聖と俗の混在によって、聖俗二元論という二項対立的な図式による救いの限界を超えることが可能となったのである。

第四章では、第三章の議論から浮かび上がってきた音楽と聖俗の問題について取り上げた。聖俗の境界線と「黒人かアメリカ人か」という境界線の狭間で、アフリカ系アメリカ人の音楽が揺れ動いてきた。そのなかで、いかにヒップホップが聖俗の境界線を超克し、聖と俗をつなぎあわせてきたのかをアフリカの宗教におけるトリックスターなど

から考察した。そして、ヒップホップが示す救済の諸相を論じた。

結論では、ヒップホップの宗教的機能がヒップホップ世代のアフリカ系アメリカ人においてどのような役割を果たしているのかを総括した。ヒップホップは聖俗二元論による音楽の境界線の正当性に挑戦しながら、神の救いから一方的に排除されたヒップホップ世代のアフリカ系アメリカ人の救いについてラップしてきた。しかし、それは教会から排除された者が自分たちを救済するという自己満足的なものとして理解されるべきではない。ヒップホップにおける救済の諸相は、アフリカ系アメリカ人の宗教史における対立や分断に対する積極的な応答であると筆者は考える。

ヒップホップにおいて示される救済の諸相は、聖俗の境界を超え、聖俗二元論やそれに基づく教会の権威といった既存の秩序に挑戦してきた。アフリカ系アメリカ人の現実やアイデンティティは重層的なものであり、黒人教会が示す戦略的本質主義においてはその価値観を受け入れる者しか救われない。教会においてキリスト教の教理が固定化されるときにその救済が限定的・閉鎖的なものとなってしまうのとは対照的に、「徹底した正直」において語られる「個」の経験を共有する対話の空間としてのヒップホップは、固定化されることなく現実に開かれている。ヒップホップは多様な現実を反映することによって、変化し続ける現実に対する救済は神が共にいるそれぞれ生のなかに見出されることを示してきた。そして、その「徹底した正直」による対話こそが、多様化した現実のなかで誰をも排除することのない救済の形の探求を可能としてきたのである。ヒップホップはその探求を通して、社会階層の二極化や信仰の私事化、世代間の価値観の違いによる断絶の時代のなかで、アフリカ系アメリカ人のヒップホップ世代を一つの共同体として繋ぎ止めている。